

## オックスフォード便り(2)

2017年9月16日

北村行伸

9月16日からオックスフォード大学の Alumni Weekend の講義が始まり、私は朝10時から Tim Besley の Economic policy-making: Lessons from the past 30 years という講義を Keble College で聞きました。Tim Besley は現在 LSE の教授で、2006-2009 年にはイングランド銀行の金融政策審議員を務めています。研究分野としては開発経済・公共経済の分野で活躍してきましたが、現在のイギリス経済学会の重鎮となっています。指導教官はセン教授であり、私とほぼ同時期にオックスフォードにいた関係で学生時代から知っていました。

Tim の講演は、イギリス経済がこの30年間に経験してきたことを忌憚なく評価するということで、多くのエピソードを交えながら、イギリスがなぜ世界の覇権国家ら、2流国に下がり、近年それを盛り返してきたかを語っていました。意外だったのは、イギリスは金融・保険・法務・高等教育などのサービス業で収益をあげているものだと思っただけでしたが、伝統産業である鉱業や製造業(aerospace など)でもそれなりの収益をあげているということでした。Tim は金融政策の現状にかんしてはコメントしませんでした。金融業の在り方にかんしては比較的肯定的でした。

午後2時半からは、歴史学部で The Global Middle Ages というテーマで Catherine Holmes, Conrad Leyser, Amanda Power の3人がオックスフォードを中心にヨーロッパの歴史学者が中心になって、中世においてグローバルとはどういう意味があり、過去の研究とどのように結びつけられればいいのかを実証的に明らかにするという試みでした。チェスの世界的な普及や、仏陀像のスカンジナビアへの普及、ペストの拡大、コロンブスの大航海の再解釈など多くの研究テーマがあることが示されていました。私個人的には、社会・経済制度がどのように普及し、またローカル化していくのかが知りたいところであるし、グローバルに展開する制度や財とローカルに留まる制度や財の違いを体系的に研究できれば、現代社会での国際化への対処に役立つのではないかと思いつきながら、講義を聞いていました。

午後5時半からは、セント・アントニーズ・カレッジの中東研究センターで Tom Friedman の講演会があり、The Age of Accelerations and Its Impact on the Middle

East というタイトルでした。講演の内容は、近著である Thank You for Being Late: An Optimist's Guide to Thriving in the Age of Accelerations (Fsg Adult, 2016/11/22 刊) について語ったものでした、フリードマン氏はセント・アントニーズ・カレッジの卒業生で、『レクサスとオリーブの木』や『フラット化する世界』『グリーン革命』『グラウンドゼロ』など世界的なベストセラーを連発しているジャーナリストです。

講演はさすがに稀代のジャーナリストだけあって、テキストをほとんど見ることなく、1 時間話続けても、まったく終わる様子もなく、世界各国で起こりつつあることについて事細かに語り続けていました。彼の論点は、一つは地球温暖化の事実、もう一つは、インターネットの普及によるネット社会の拡大、もう一つはムーアの法則に基づく IC チップスの性能の向上、これらすべては非線形に膨張 (accelerate) しているという事実から、世界の在り方は大きく変わらざるを得ないということを説得的に論じることにありました。もちろんこの膨張がいつまでも続くということはないにしても、2007 年以後、世界の局面が変わったのだということ、地元のワシントン DC やミネアポリスの現実と連動させながら、語ったその語り口は確かに説得力があり、様々な面で刺激をうけました。講演後機会があったのでフリードマンとその内容に関して議論をしました。

このイベントは、各参加者がカレッジの寮に宿泊し、食堂で皆と食事を共にするというオックスフォードの学寮制度の基本に立ち返るスタイルをとりました。分野の違う人間が夜遅くまで、議論を続けるということの素晴らしさを改めて感じた 3 日間でした。